

『神様の余り物』

松井 貴

【登場人物】

パク（17）・・・謎の男の子。

長谷川優貴（24）・・・会社員、営業職。

長谷川ゆり子（56）・・・優貴の母親、入院中。

代田朋子（24）・・・優貴の大学時代の同期。

看護師の女（？）・・・病院の看護師。

兵士（？）・・・どこかの国の兵士。

○ 都内の環状道路（夕方）

どこかの道を走る車のフロントバンパーが、路面の凹凸に合わせて揺れている。

そこに入るタイトル『神様の余り物』。

○ 走る車・車内（夕方）

車内。

運転中の長谷川優貴（24）。

首から下げた社員証に名前と顔写真が載っている。

スーツ姿、耳にイヤホンをして、ハンズフリーで誰かと電話をしている。

優貴「はい、そんなに怒ってなかったです、はい、そうですね、すみませんでした、はい……」

車内の灰皿に差されたタバコは、煙を出し続けて灰が長くなっている。

優貴「はい、このまま帰ります、お疲れ様でした」

電話を切った様子の優貴、腕時計を見

て、イヤホンを引っ張って外す。
車のルームミラーにはバスケットボールのキーホルダーが揺れている。

○ 病院・外観（夕方）

病院の敷地内に優貴の営業車が入ってくる。

○ 同・病室（夕方）

個室の病室に入ってくる優貴。ベッドには女・長谷川ゆり子（56）が寝ている。
眠っているゆり子を見て、ホッとする優貴。
ジャケットを脱いで、その辺にかける。
慣れた様子で椅子に座り、ベッドの縁に突っ伏す。
カーテンが開いていて、窓は閉まっ
ている。
窓から差す夕日が、2人を包む。

○ 駅付近の高架下（夕方）

高架下の人気のない歩道。

脇にダンボールで作られたテントのようなものがある。

ダンボールの脇に横になっている少年・パク（17）。汚れた服を着ている。おもむろに目を覚まし、体を起こすと、辺りを見回す。

ダンボールに埋もれている汚れた男を見て、話しかけている様子のパク。

男と楽しそうに会話をしている。

電車の走る音が、その会話をかき消す。

○ 病院・病室（夕方）

窓が開いている。

遠くで電車の音がする。

ゆり子は起きていて、窓を眺めながら優貴の頭に手を置いている。

風がカーテンを揺らし、ふと目を覚ま

す優貴。

ゆり子「（微笑んで）おはよう」

時間の感覚を忘れていた様子の優貴が腕時計を見る。

優貴「寝てた、どうだった？検査」

ゆり子「いつも通り」

優貴「そか、（間を置いて）帰ろうかな」

ジャケットを取る優貴。

ゆり子「優貴、ほら」

そう言うと、横の引き出しを開けようとするゆり子。

優貴「ああ、いいよいいよ、じゃまたね」

病室を出ていく優貴。

遠くでまた、電車の音がする。

脇に置いてあるスケッチブックに優貴の寝顔と、バスケットボールが描いてある。漫画のようなタッチ。

○ 駅付近の高架下（夜）

電車の音が激しく鳴る。

ダンボールのところで、パクが覆いかぶさるように男を押さえつけている。俯瞰。四角く囲われたダンボールの中で抵抗している男。息を荒げて、男を抑え込んでいる様子のパク。程なく動かなくなる男。

× × ×

開いた酒の缶が転がっている。男は死んでおらず、眠っている様子。パク、男の横に座り、顔を見下ろしている。おもむろに、男の頭を全身で包み込むように横になるパク。ゆり子が優貴を撫でていたような体勢になっている。キーンと、耳鳴りのような音が鳴る。

○ 公園・バスケットコート（夜）

暗がりの中に浮かんでいるように街灯

を帯びたバスケットコート。人影がち
らつく。

ボールをつく音がする。

ゴールに、ボールが音を立てて入る。

転がったボールを慣れた手つきで拾う

と、誰かにパスをする優貴。

パスされたボールをキャッチしたのは、

女・代田朋子（24）。部屋着っぽい。

朋子、慣れた手つきで数回ドリブルを

すると、優貴を抜いてシュートをする。

ボールはゴールに吸い込まれる。

朋子「（ボールを拾いながら）ゆり子さん大丈夫

夫だったのね」

以下、シュートしたりパスしたりする

2人。

優貴「現状維持だね」

朋子「扶養入れたばっかだもんね、あたしは

明日行こうかなー」

優貴「個人情報やろ」

朋子「ふふ、社員全員の給料教えようか？」

優貴「部長にさ、フォロー入れたっしょ？」

朋子「だって（見てらんないんだもん）」

優貴のシュートはリングに弾かれる。

優貴「朋子、リバウンドとれよー」

パクの足が、コート脇に。

○ 駅付近の高架下（夜）

ダンボールに埋もれて、倒れている男。
目は開いているが、廃人のように目の
前の空間を眺めている。

○ 駅前の実景（翌日）

○ 駅前・喫煙所

大きな駅の前、行き交う人々。
十数名の喫煙者に紛れて、喫煙所でタバコを吸いながら何かを見上げている
優貴。手には電気屋の買い物袋を提げ
ている。

大型ビジョンに海外の戦争の様子が流

れている。戦車が死んだ兵士たちの上を走っている。兵士たちには、ボカシなど入っておらず、潰されていく様子がまざまざと見せられる。なんとなくそれを見ている優貴。離れたところにパクが立ち、大型ビジョンの画面を見上げている。火の付いていないタバコを持つパクの手。

パクの前にライターが差し出される。

優貴、

優貴「よかったら」

パク、タバコと、優貴を見てそれに応じる。

優貴「（外国人か・・・）」

パクのタバコに火を付ける優貴。

パク「夢は、探してますか？」

優貴「夢？」

パク「・・・」

優貴「（画面を見上げて）あそこに立ったら思

い出すかもですね」

パク「じゃあ、戦争すればいい、みんなで」

優貴「（なんだこいつ）」

画面、おびただしい数の真っ白な無人機が空を覆い、空爆を行なっている。

○ 病院・病室

少し戸惑った様子で何かを見ているゆり子。髪を撫でている。

ゆり子を見ているパク。

パクを見ていた優貴、ゆり子を見て、

優貴「友達、大学の時の、パクくん」

電気屋の買い物袋が手にぶら下がり揺れている。

○ 同・喫煙所

タバコを吸っている優貴。

パク「優貴のお母さん、夢がない、もうすぐ死ぬ？」

優貴「（笑って）韓国人ははっきり言うね」

パク 「韓国人じゃない、人間です」

優貴 「はいはい、みんな人間ね」

パク 「・・・」

優貴 「怒ってないよ」

パク 「・・・」

タバコを消す優貴。

優貴 「（ふと気づいて）吸わないの？」

パク 「吸わない」

優貴、パクを見るが、そのまま振り返

り喫煙所を出る。

パクもそれに続く。

○ 同・エントランス（夕方）

外に出てくる優貴とパク。

パクが、入り口の前で立ち止まる。

それに気づいた優貴、

優貴 「バスケットやったことある？」

パク 「んーないけど、やらないです、もう少し

し、ここ見て帰る」

優貴 「病院を？そか、じゃ、またね、あんま

り人について行っちゃダメだよ」

パク「優貴は知ってる人」

優貴「はいはい、じゃ」

歩き出す優貴、院内に引き返すパク。

○電車の中（夕方）

優貴、音楽を聴きながら吊り革に掴ま
っている。

ふと、目の前の男が持つ電気屋の袋を
見ると、ハツと思い出したようなそぶ
りをして、

優貴「マジかあ」

○病院・通路（夜）

誰もいない、暗い通路を歩いてくる優
貴。イヤホンを取る。

○同・ナースの待機場所？（夜）

机に伏せて寝ている様子の看護師の女。
そこへやってくる優貴。カウンター越

しに、

優貴「（声を小さくして）あの一、忘れ物しちやっつて・・・」

反応しない看護師の背中。

机の上には、看護師の参考書が何冊か置いてある。

優貴「あの一、すいませ・・・」

突然勢いよく立ち上がる看護師。

驚く優貴。

優貴「あの一、お姉さん？」

ゆっくりと座る看護師。

カウンターのの中に入り、ゆっくりと看護師に近づく優貴。

もう一度、勢いよく立ち上がる看護師。

椅子が優貴の方へ飛んでくる。

驚いて避けるが、そのまま看護師の方へゆっくりと近づく優貴。

優貴「（顔を覗き込みながら）大丈夫ですか？」

看護師の顔。

目を開いているが、視線は遠く、どこ

を見るでもなく放心状態で空間を見て
いる。

優貴、恐ろしくなって後ずさる。

○同・通路（夜）

ゆり子のうめき声が聞こえる。

○同・ナースの待機場所（夜）

ゆり子の声に気づく優貴。

一目散に駆け出す。

○病院・病室（夜）

中に入ってくる優貴。

優貴「母さん！」

何かに気づいて立ち止まる優貴、驚く。

ベッドの上のゆり子の頭を全身で包む

ように横になっているパク。

ゆり子が必死に抵抗している。

キーンという、耳鳴りのような音。

優貴「（音に身じろぎながら）母さん！」

優貴、ベッドへ駆け寄り、パクの肩に手をかけたその時、異形の顔になったパクが、獣の威嚇のようになり、優貴を牽制する。思わず、腰を抜かして後ろへ転ぶ優貴。パク、四足歩行で病室から出ていく。静かになる病室。不意にゆり子が心配になりベッドに駆け寄る優貴。

優貴 「大丈夫！！？」

ゆり子は遠い目をしている。スケッチブックには四足歩行の動物のような絵が書いてある。パクが逃げた方から、女の悲鳴が聞こえる。朋子だ。ゆり子を大事にベッドに寝かせて、病室を出る優貴。

○同・通路（夜）

通路に駆け出してきて、何かに気づい

て立ち止まる優貴。

通路の奥には、四足歩行の動物のよう
な獣がいる。

朋子の服を啜えて、朋子を引きずって
いた。悲鳴をあげている朋子。

病室から患者たちが湧き出してくる。
優貴、その向こう、パクと朋子を探す。

逃げ惑う患者たちの向こうに、パクと
朋子がいる。

パク「バスケ、やろうよ、優貴」
悲鳴をあげる朋子を啜えたまま走り去

るパク。
優貴、ゾツとして、追いかける。

○バスケットコートへ向かう道

走る優貴。

○公園・バスケットコート（夜）

暗がりの中に浮かんでいるように街灯
を帯びたバスケットコート。

ボールをつく音がする。
ゴールに、ボールが音を立てて弾かれる。
人間の姿をしたパクがボールについている。

優貴「朋子！」

コート内に入ってくる優貴。

パクを見つけて立ち止まる。

パク、優貴に気づいて、

パク「優貴、バスケしようよ」

優貴「朋子は！」

パク、コートの際を見る。

パク「夢、なかったよ、兄ちゃん、あの子ども、

おかあさんも、大丈夫だよ」

優貴「夢？」

パク「優貴も夢がないです、だから食べられない」

優貴「なんだよ、意味わかんないよ」

パク「いい夢も、悪い夢も、全部食べる、僕は神様の余り物、でも、忘れ物」

優貴「だから意味わかんないよ！なんだよさ
っきの！パク大丈夫かよ！」
パク「・・・。優貴はいい人、ごめんなさい、
夢を見ても、悪い夢だけ、食べる、だから、
許して」

優貴、朋子のところへ駆け寄る。

優貴「大丈夫か、朋子！」

朋子、優貴に起こされて、安心して泣
き出す。

優貴「ああ、よかった、大丈夫か！？」

朋子「（泣きながら）大丈夫、大丈夫」

ハツとして、パクのいた方を見る優貴。

そこには誰もいない。

転がっているバスケットボール。

優貴「なんだよ、なんだよ！」

○朝の実景・なんでもない朝感

○駅付近の高架下（朝）

ホームレスが横になっている。

手にポストカードらしきものを持って
いる。

南国の優雅な自然に満ちた写真。

○病院・食堂（朝）

看護師の女、弁当を食べながら、勉強
をしている。（看護関係？他の資格？）

○会社・朋子の机（朝）

手首に包帯を巻いた朋子が、元気に仕
事をしている。

そこへやってくる優貴。

優貴「どう？具合は」

朋子「？私はずーっと、元気ですけど？」

優貴「（笑って）ばか」

朋子、時計を見て、

朋子「ほら、行ってきなさい！悪い夢ばっか
見ていると、またあいつがやってくるよ！」

優貴の背中を勢いよく叩く朋子。

優貴「（痛くなさそうに）いてっ！はいはい、

行ってきました」

会社を出ていく優貴を見送る、朋子の顔は清々しい。

○車内（朝）

車内。優貴が乗り込んでくる。シートベルトを締める。ルームミラーをチェックする。ふと、そこにかかったキーホルダーを指で叩いて揺らす。

○ある道路

長い一本の道。優貴の営業車が奥へと走っていく。カーラジオがスタートする。ラジオのイントロ？が流れる。ラジオ「さあ、来月から日本も中東への派兵が決まっておりますが、相変わらず世間は見て見ぬ振り、今日も一日、普通にお仕事ですかー？平和ボケしてませんかー？いや、全

然平和ではないですよ！戦争してますから！
キング牧師の夢も叶わず、ベトナム反戦運動
糞食らえですかー？」

○病院・病室（朝）

ゆり子がベッドで体を起こし、絵を描
いている。

ラジオが脇に置いてある。

ラジオ「今日の一言はこれで決まり。『心
の中に夢をしまっておく場所を、いつも空け
ておきなさい』キング牧師の言葉ですねー。
今日も1日頑張っていきましょうー！」

ラジオのエンディングが流れる。

絵を描くゆり子の手元。

バスケットをしている、今の優貴。

○どこかの国

荒廃した家屋が並ぶ街並み。

白人の兵士が、建物の陰に倒れている。

胸部から血を流し、息を引き取ろうと

している。

近づいてくる人影に気づき、銃を向ける兵士。

そこに立っているのはパク。

優しい眼差しで、兵士を見下ろしている。

パク「助けること、できないけど、悪い夢なら、僕が、食べるよ」

おしまい